

# “AET 世代”と大学英語教育改革

宮下 和子\*

## The “AET Generation” and College English Education Reform

Kazuko MIYASHITA\*

### Abstract

Launched by Education Ministry in 1987 with an initial 848 participants from four countries, the Japan Exchange and Teaching (JET) Program has allowed young people from overseas to work in Japanese middle and high schools as language teaching assistants. The expansion of the program, with the participants in 1993 numbering 3,785, has raised varied questions among middle and high school English teachers. Also, the spring of 1994 is to see the implementation of a new communication-oriented curriculum in high school English education, which is likely to stir further discussion among English educators throughout the nation.

In addition, the “JET effect” appears to have extended to the college level; the spring of 1993 saw Japanese colleges enrolling members of the “AET generation” who had experienced six years of English classes with AETs. Such students must have not only studied the English language but also sensed or realized all phases of cross-cultural communication through team-teaching conducted by JTEs and AETs. In a way, they had been exposed to a course of international exchanges in their real school life. I wonder how such global circumstance could affect their anticipation in terms of English education at college level.

College English education has been practiced with traditional methods so far, independent of its lower level counterpart. However, could it sustain such a posture without considering a new wave brought by the JET program? In order to search for a way to meet the needs of the “AET generation,” I conducted a survey among NIFS students and a number of AETs in Kagoshima prefecture and in other places as well.

The result suggests that English education in Japan needs to be coordinated from middle school level through college level. Also the majority of the “AET generation” ranked team-teaching in their college classes as their second most important priority in the questionnaire (first was studying English abroad). Under these circumstances, college English education should undergo a course of reform, such as introducing team-teaching, which will produce cross-cultural interactions among JTEs, NETs (Native English Teachers) and students.

In order to have students gain cross-cultural awareness through English education, the JTEs could perform role models as internationally-minded Japanese with their own identities. Eventually college English teachers are to share with their middle and high school counterparts in those challenges brought by the JET program. It could be concluded that English education should be integrated through the whole educational level in light of “internationalization” of Japan.

**KEY WORDS** : *English education, JET program, AET, JTE, the “AET generation”*

---

\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

## 1. はじめに：7年目の JET プログラム

1987年度より、文部省が他省庁や地方公共団体の協力のもと、中学や高校の英語教育現場に英語母国語話者として英語指導助手 (Assistant English Teacher = AET) を招致してきた JET (Japan Exchange and Teaching) プログラムが6年目を迎えた。初年度わずか848名の参加者が、1993年度には1,708名の更新組に新規2,077名を加えて3,785名に膨れ上がり、その出身国も、当初の4カ国 (米国, 英国, オーストラリア, ニュージーランド) にカナダ, アイルランド, フランス, ドイツ, 中国, 韓国が加わり、10カ国に増加している<sup>1)</sup>。

プログラムの拡大に伴って、英語教育現場には、日本人英語教師 (Japanese Teacher of English = JTE) と AET とのチーム・ティーチング (協同授業) の是非やあり方など、AET がらみの英語教育をめぐる悲喜こもごもの議論が起こっている。1994年4月には、高校のカリキュラムに新たに「オーラル・コミュニケーションA」「同B」「同C」が導入されることになり、JET プログラムをめぐる議論に新たな問題提起を投げかけることになりそうである。

この“JET 効果”は、ついに大学の英語教育現場にも深刻な影響を与えようとしている。というのも、1993年4月、中学、高校の6年を通して AET と共に英語を学んだ“AET 世代”が初めて大学に入学し、大学英語教育を経験することになったからである。果たして、AET と JTE とのチーム・ティーチングや異文化コミュニケーションの直接的洗礼を受けたともいえる“AET 世代”が、大学英語教育に抱くイメージや期待度において、前世代との間に何らかの違いや変化が見られるであろうか。あるいは、そうした比較や考慮などとは無関係に、つまり、中学、高校、大学連携の一貫した英語教育という視点無しに大学英語教育は独走し続けられるのであろうか。

ともすれば、中学や高校の英語教育とは無関係に独立独歩の観を呈してきた大学英語教育が、この現実直面したいま、いかに対処すべきなので

あろうか。本稿では、こうした現実を鑑み、英語教育現場を預かる英語教師の独りとして、“AET 世代”という新しい学生集団を迎えた大学での英語教育改革という視点から問題提起をすると共に、一試案を提起したい。

## 2. “AET 世代”の大学入学

AET との交流や、AET と JTE とのチーム・ティーチングが学習者に与える影響の一つとして、カルチャー・ショックがあげられる。テキストの描く出来事が、単に空想の世界ではなく、教育という現実界で AET の異文化と JTE の自文化が衝突するという直接的経験を通して、学習者のカルチャー・ショック、つまり「個人内コミュニケーション」は異文化理解へと誘導されることになる。和田 (1991) も、「チーム・ティーチングは、日本人教師の持つ『潜在的文化』なり価値観が実際の授業の中で生徒の目前で生徒を参加させつつ統合されたり、衝突したりする場である」と定義づけている<sup>2)</sup>。その意味で、自文化の具現者である JTE と異文化の体現者である AET とのチーム・ティーチングそのものが、具体的かつ日常的な異文化コミュニケーションのプロセスを反映した多様なシナリオとなりうるわけである。

たとえ、その目標が受身的な知識吸収型の「受信英語」であろうとも、英語を単なるテキスト上の学習目標としてだけではなく、具体的な文化を内包した生きた (living) 言葉として体感しつつ学んだ経験を持つ“AET 世代”が、大学において JTE だけによる伝統的な教授法に支えられた講義に臨むとき、どのような印象をもつであろうか。それと同時に、ようやく一方通行の「受信英語」から脱皮し、知的にも人間的にも自己確立と双方向の交信に基づいた「発進英語」の習得に目覚める段階にある“AET 世代”にとって、たとえその内容が日本や自文化に関するテキストであろうと、自文化のみの集団で学ぶクラスワークに物足りなさを感じることはないであろうか。

異文化コミュニケーションを通しての「発進英語」を目指した英語教育の一環として、学生の実生活環境下での異文化交流を描いたオリジナルテキ

ストの作成と活用は、かなりの教育的効果をもたらした<sup>3)</sup>。そこでは、身近な（自文化）環境下でテキストに登場する日本人とアメリカ人との異文化コミュニケーションを擬似体験することを通して、日本人としてのアイデンティティを伴って初めて「発進英語」としての対話が成立することも確認できた。しかし、それだけでは“AET 世代”を満足させることは無理であろう。なぜならば、JTE 指導のクラスでは、何よりも教師対学生という従来の日本的なクラスワークの枠組が浮き彫りにされ、JTE 自身が異文化と向き合い、自文化を代弁、主張するという生きたロール・モデルとしてのパフォーマンスの見せ場がないからである。

そこで、中学、高校、大学連携という視点で大学英語教育の展望を探るために、学生に対しては、AET との学習経験の実態や、大学英語教育に対するイメージや希望についてアンケート調査を実

施することにした。また、現 AET や経験者に対しては、日本での日常生活や教育現場、JTE とのチーム・ティーチングについてのコメント、また JET プログラムの将来性や日本の「国際化」についてアンケート調査を実施することにした。このように双方から問題点を浮き彫りにすることにより、中・高・大連携という観点に立った大学英語教育の自己改革の方向について具体的なヒントが得られるものと確信する<sup>4)</sup>。

### 3. 鹿屋体育大学学生へのアンケート調査と結果分析（資料①参照）

鹿屋体育大学学生へのアンケート調査は、1993 年 5 月、海外渡航経験などの予備調査も含め、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語Ⅲ」の授業中に行い、以下の結果を得た。

#### 1) 調査学生人数

	男	女	合計	女子占有率(%)
一年 (AET 世代)	127	38	165	23%
二年	104	30	134	22%
三年以上	57	18	75	24%
合計	288	86	374	23%

#### 2) 海外渡航回数

	0	1	2	3 以上	総人数	渡航率(%)
一年 (AET 世代)	135	26	4	1	165	19%
二年	112	17	3	2	134	16%
三年以上	66	4	4	1	75	12%
合計	313	47	11	4	374	17%

#### 3) 海外渡航先

	韓国	米国	ホンコン	中国	ドイツ	豪	グアム	フィリピン	他	合計
一年 (AET 世代)	19	5	3			2	1		2	32
二年	1	6	1	2	2			1	2	15
三年以上	8	2	1	1	1		1		1	15
合計	28	13	5	3	3	2	2	1	5	62

#### 4) 質問内容及び回答結果（各々の表参照）

1. 中学時代、英語の授業で AET に、平均どのくらい習いましたか。[表 1-1]
2. AET はどこの国の人でしたか。[表 2-1]
3. 中学時代、AET の授業をどう思いましたか。[表 3-1]
4. JTE（日本人英語教師）と AET の協同授業はどうでしたか。[表 4-1]
5. 中学時代、JTE と AET の協同授業について、どのように感じましたか。[表 5-1]

6. 高校時代, 英語の授業で AET に, 平均どのぐらい習いましたか。[表 6-1]
7. AET はどこの国の人でしたか。[表 7-1]
8. 高校時代, AET の授業をどう思いましたか。[表 8-1]
9. JTE (日本人英語教師) と AET の協同授業はどうでしたか。[表 9-1]
10. 高校時代, JTE と AET の協同授業について, どのように感じましたか。[表10-1]
11. 中学, 高校時代と比較し, 大学の英語や英会話の授業をどう思いますか。[表11-1]
12. 大学の英語や英会話の授業に関して, どういうことを望みますか。[表12-1]

表 1-1  
中学 AET 平均授業回数

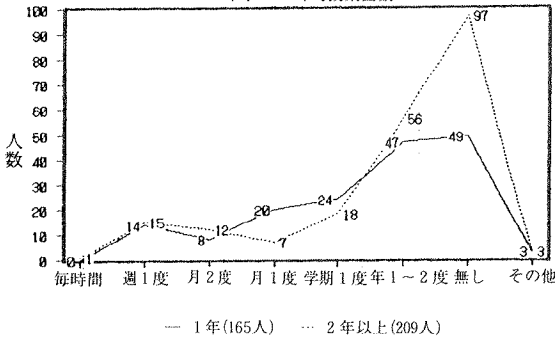


表 2-1  
中学 AET 国籍

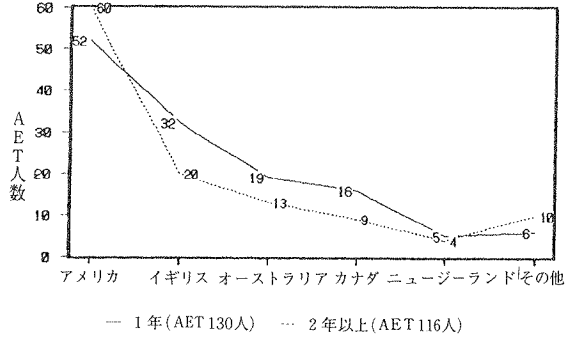


表 3-1  
中学 AET 授業感想

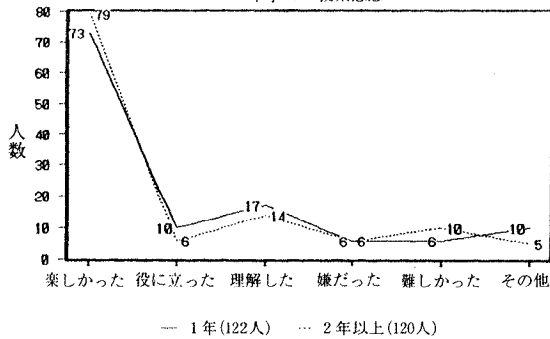


表 4-1  
中学 JTE 協力度

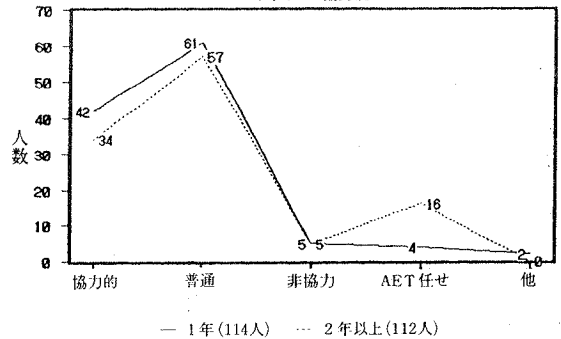


表 5-1  
中学共同授業感想

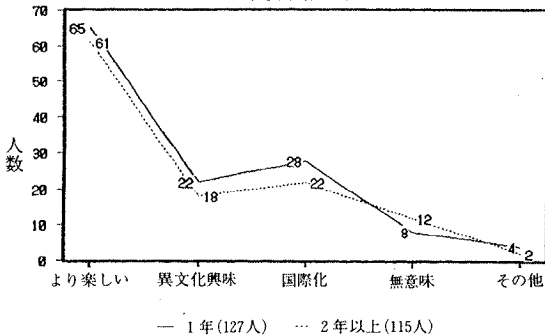


表 6-1  
高校 AET 授業平均回数

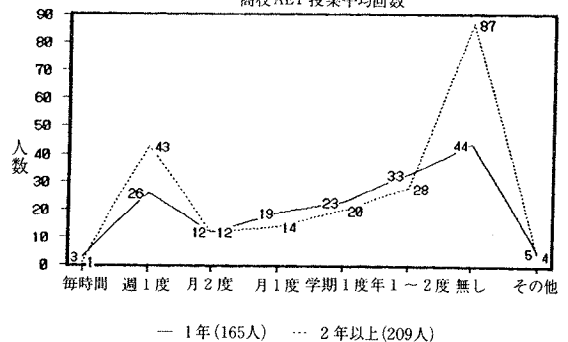
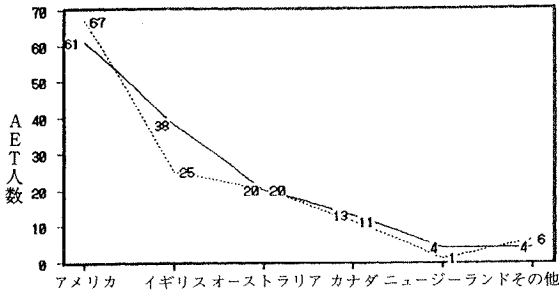
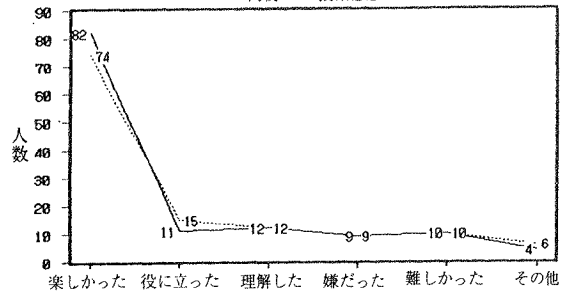


表7-1  
高校AET国籍



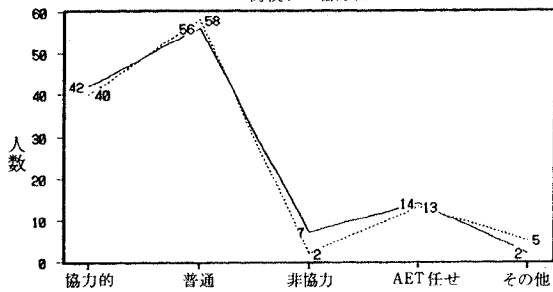
— 1年(AET 140人)    ... 2年以上(AET 130人)

表8-1  
高校AET授業感想



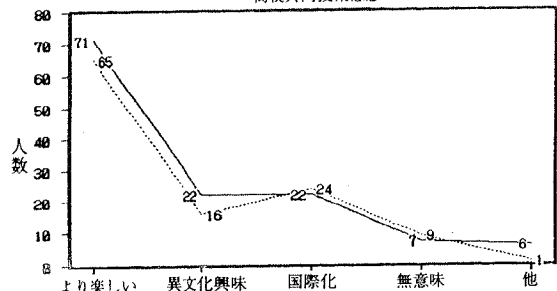
— 1年(128人)    ... 2年以上(126人)

表9-1  
高校JTE協力度



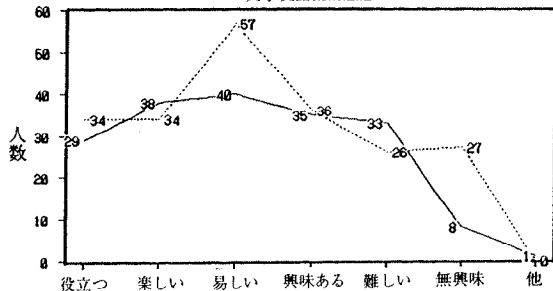
— 1年(121人)    ... 2年以上(118人)

表10-1  
高校共同授業感想



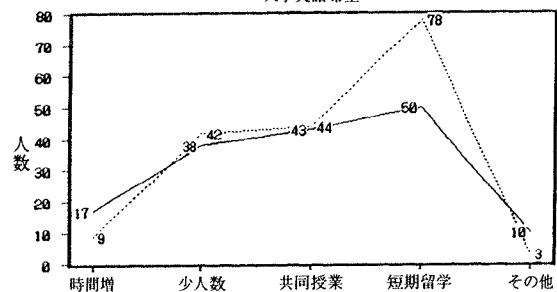
— 1年(128人)    ... 2年以上(115人)

表11-1  
大学英語授業感想



— 1年(184人)    ... 2年以上(214人)

表12-1  
大学英語希望



— 1年(158人)    ... 2年以上(176人)

### 5) 結果分析

中学高校時代の英語教育のうち、AETによる授業経験度については[表1-1]と[表6-1]が示すように、“AET 世代”に比べ、前世代では未経験者が全体の3分の1以上にも上っている。AET参加授業の感想としては、両世代とも「楽しかった」をトップに挙げている。また、チーム・ティーチングの感想としては両世代とも「(単

独授業)より楽しい」をトップにあげ、続いて「国際化」「異文化への興味」を挙げている。更に、チーム・ティーチングにおける日本人教師の協力度については、両世代とも「協力的」あるいは「普通」だったと好意的に捉えているのがわかる。大学の英語教育について、入学直後の“AET 世代”は意欲的であったが、前世代では意欲を失っている者が多く見られた。また、大学英語教育に希望することとしては、両世代とも「短期留学」

をトップに挙げ、続いて「チーム・ティーチング」「少人数クラス」「クラス時間増」となっている。興味深いことに、前世代では「短期留学」が圧倒的に人気があるのに比べ、“AET世代”では「短期留学」とほぼ並んで「チーム・ティーチング」が挙げられており、彼らの異文化コミュニケーションに対する高い関心と期待を示唆しているといえよう。

#### 4. AET へのアンケート調査と結果分析 (資料②参照)

AET に対するアンケート調査は、1993年6月に実施した。鹿児島県内72名の AET のうち、国籍や性別、地域性などを考慮のうえ20名を抽出し、依頼文、自由コメント用紙、アンケート用紙を同封して郵送し、最終的には16名から回答が得られた。その後、米国在住の元 AET の協力を得て県外や海外在住の AET 経験者13名からも回答が寄せられた<sup>5)</sup>。以下がその結果であるが、表中の A は県内 AET、B は県外や海外在住者からの回答結果を示す。

1) Q 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 12, 13, の質問内容及び回答結果

1. I enjoy/ed working and living in Japan.
2. I enjoy/ed teaching English/foreign language to Japanese students.
3. I enjoy/ed team-teaching with Japanese teachers of English.
4. I have/had difficulty/trouble communicating with Japanese students.
5. I have/had difficulty team-teaching with Japanese English teachers.

		Most of the time	Sometimes	Seldom	Never	計
1	A	14	1	0	0	15
	B	12	1	0	0	13
	計	26	2	0	0	28
2	A	10	5	0	0	15
	B	8	5	0	0	13
	計	18	10	0	0	28
3	A	5	8	3	0	16
	B	5	5	2	0	12
	計	10	13	5	0	28
4	A	1	10	4	0	15
	B	1	9	3	0	13
	計	2	19	7	0	28
5	A	2	10	3	0	15
	B	1	8	3	0	12
	計	3	18	6	0	27

6. I am/was keenly interested in English language education in Japan.
7. The JET program is useful for improving teaching English in Japan.
12. The JET program contributes to the “internationalization” of Japan.
13. I contribute/d to the “internationalization” of Japan as AET/ALT.

		I agree	I agree somewhat	I disagree somewhat	I disagree	計
6	A	5	4	5	1	15
	B	6	6	1	0	13
	計	11	10	6	1	28
7	A	3	7	4	0	14
	B	6	6	1	0	13
	計	9	13	5	0	27
12	A	3	8	2	0	13
	B	5	7	1	0	13
	計	8	15	3	0	26
13	A	7	6	2	0	15
	B	6	7	0	0	13
	計	3	13	2	0	28

2) 自由記述の Q 8, 9, 10, 11, 14 の質問と回答内容 (抜粋して著者和訳)

Q 8. What have you found most frustrating while teaching Japanese students?

(日本人の生徒を教えてみて、最もいやだったのはどんなことですか。)

- A) 自分が Assistant に過ぎないということ。  
JTE による grammar translation method の授業形態。  
英語会話力が重要視されず、定期試験や入試においても具体化されていない。  
日本人生徒が shy で、話そうという意欲に欠ける。
- B) 日本人生徒は、新しいものや違うものは何でも苦手 (uncomfortable) と感じている。  
能力ある生徒をも授業中の態度を消極的にさせる、教室内のある種の圧力。  
文部省検定の教科書を使わねばならず、個人的な教授プランの自由が無い。

Q 9. How beneficial have you found your AET/ALT experience?

(あなたにとって、AET としての経験はどのように有益ですか。)

- A) 日本文化の体験と日本語能力の向上。  
TEFL (Teaching English as Foreign Language) の言語研究者には貴重な経験となる。  
今はわからないが、将来的に貴重な経験となろう。  
日本の教育について、長所と短所が認識できた。
- B) 帰国後、米国で日本人に英語を教えているがいまならもっとうまくやれる気がする。  
教育経験を積み、国際理解に役にたった。  
(1987-1988 滞日)  
教育的財政的に有益だったが、特に自分の global awareness の育成に役立った。  
自分自身の能力や偏見などに気づいた。

非常に有益。ぜひ来年また日本に行きたい。  
(1991-1992 滞日)

Q10. What deficiency have you found in the JET program?

(JET プログラムには、どのような短所があると思いますか。)

- A) システムに専門性が見られず、ティーム・ティーチングをはじめ統一性に欠ける。  
ネガティブな面のみが表面化している。  
早期英語教育の必要性を感じる。
- B) JTE に十分なオリエンテーションを行い、AET との協力を明確化する必要がある。  
JTE の立場 (status) が正確に定義づけされていない。  
地方の研究会 (meeting) で、TEFL などの専門家による訓練の機会を増やす。  
3 年という更新の制限年数を延長してほしい。(AET の成長のため)  
日本の英語教育の目的の分岐点。試験が個人の努力に報いない。  
JTE とのティーム・ティーチングに向けて、AET に対する特別トレーニングが必要。  
AET の役割についての地方レベルでの認識不足。

Q11. What does “internationalization” mean to you?

(あなたにとって「国際化」とはどのようなことですか。)

- A) 国家単位でなく、異なる人間や文化を理解し、受容する日常的な異文化交流。  
日本の「国際化」は西洋の模倣でなく、アジア諸国をパートナーとする独自のもの。  
英語教師であることと、「国際化」を目的とした AET との役割は異なる。  
自分は多人種国の出身で海外旅行体験も豊富だが、それで国際的とはいえない。  
日本人の多くは、異文化の表面のみに興味を持っているように思われる。  
自分の存在が単に「客」として扱われてお

り、人間として扱われていない。  
真に外国人を取り込むまでは「国際化」とは云えない。

「国際化」とは、政治的キーワードである。相違を喜んで受け入れる、友情へのためまないかけ橋。

異文化に触れさせ、よい面は取り入れる。先ず人間が存在し、国籍はその次である。外国人と触れさせると共に、JTE を外国に出し、異文化経験をさせる。

近い将来、日本人の子供が「ガイジン」といわなくなること<sup>5)</sup>。

「国際化」とは一つの国や社会を取り上げて、そのモデルに自分を近づけることではなく、多様な国や社会とのかかわり合いを持ち続けること。

- B) 多様な異文化の人々がお互いの“strangeness”に寛容性を築き、全ての可能性に心を開きながら「世界市民」となること。多分数百年かかるだろうが。

我々人間について、相違点より共通点への理解を深める。

異文化の特徴、長所、短所などを意欲的に学び、自分や自文化への理解を深めること。

日米両国民にマスコミが植え付けた神話を、相互的草の根交流でなくすこと。

- Q14. How do you think the JET program can be improved to meet the “internationalization” of Japan?

(JET プログラムをどのように改善したら日本の「国際化」に役立ちますか。)

- A) AET を、教育システム自身や地域社会に同化させる。

それぞれの AET がもっと前向きになるべきである。

JTE に JET プログラムの内容を理解してもらい、AET との協体制を強化する。2年前に比べて生徒（高校生）の発話能力は向上しており、継続的努力が必要。

- B) JTE にもっと実質的な役割を果たしてもらい、プログラムを発展させる。

JTE を海外に送り出し、英語が生きた言葉であることを実感させる。

AET への無料の日本語教育。外人ショーでなく少人数のグループとの交流の推進。

JTE に対し、ALT と仕事をする前にアメリカの教育制度などを経験させる。

カリキュラムの全面的な改訂。

JET プログラムについての地方レベルでの十分なオリエンテーションの実施。

### 3) 結果分析

JET プログラムについて、各々の AET が個人的な体験としては高く評価している一方、日本の英語教育の改善や日本の「国際化」への貢献という点では疑問視していることがわかる。一つには、彼らが35才以下の若者で、日本語の予備能力もなく、ましてや英語教育の専門家でもないことも要因として考えられるであろう。また、1年毎の契約は更新しても3年間限りという条件で英語教育に従事するという現実も無視することはできない。それでも、日本の「国際化」についてはあくまでも日本独自のものであるべきだという複数のコメントは注目に値するであろう。

コメント全般にも示されているように、国家的な事業としての JET プログラムの理念や目的は認識されているとしても、地方レベルにおいては、英語教育現場においても地域住民との交流においても、すべて各々の AET による試行錯誤的な異文化コミュニケーション能力に左右されるということがいえる。こうした AET にとってのチャレンジは、換言すれば、地元の JTE や生徒たち、一般住民など全ての人々を巻き込むことになろう。

その意味でも“AET 世代”とは、英語教育の現場や日常的な場面で、このように多様な異文化衝突というチャレンジ・シーンを目撃し、英語を単に言葉としてだけでなく、異文化を携えたコミュニケーションの道具として無意識のうちに学んだ“異文化世代”といえるであろう。



## 5. 終わりに：大学英語教育改革に向けて

前述のオリジナルテキストで得られた最大の収穫は、学生たちが身近なことに関心を持ち、自分の言葉で表現することに無意識のうちに抵抗を感じなくなったことであった。「発進英語」の前提条件は、何よりもリラックスした自由な雰囲気 (academic freedom) であり、そのモデルはいうまでもなく教師であろう。まず、日本語での自主的な自己表現なしには英語での自己表現はありえないのであり、そのためにも、教師自らが自己表現に努め、楽しみ、学生の自己表現を喚起し歓迎すべきであろう<sup>7)</sup>。

さらに「発進英語」を目指すには、教師自らが異文化の人間に対して、日本人として英語による自己表現というパフォーマンスに心がけ、実行し、楽しみ、対話し続けることが不可欠といえる。萬戸 (1992) も、「英語を使うということは、日本人同士が英語で話をするのではなく、日本とは別の文化をもつ人々とのコミュニケーションを図るということになる」と述べている<sup>8)</sup>。つまりここでは、マニュアルにはない教師一人ひとりのプロ意識に基づいた即興的な異文化コミュニケーションというパフォーマンスの力量が求められるであろう。

日本における従来の英語教育活動は、大学入試を頂点として高校から中学へと下向きのベクトルが働いていたといえる。しかし、いま JET プログラムという異文化教育の導入や拡大、日本の「国際化」の影響も受けながら、徐々にではあるが確実に上向きのベクトルになりつつある。チーム・ティーチングなどを通して異文化摩擦を経験した“AET 世代”が大学英語教育に求めるのは、単なる知識の吸収だけではなく、教師や学生相互のリアルな異文化交流パフォーマンスに彩られた生の言語活動の経験と習得といえよう。換言すると、中学、高校の「受信英語」という基礎工事の上に、いま、大学の英語教育が「発進英語」、更に「交信英語」という配線工事を委託されているといえよう。

大学がこうした学生の期待に応えることはま

た、JET プログラム自身の改善にもつながるといえ、かつ中学高校現場の AET や JTE のかかえる悩みや問題解決に当たって、具体的で建設的な指針と海路を示すことにもなるであろう。それに、専門的研究と幅広い学識経験を携えた大学の JTE こそ、実は最も身近な「発進英語」のロール・モデルになりうるのではなからうか。そういう点でも、大学の英語教育現場にも AET ならぬ NET (Native English Teacher) とのチーム・ティーチングや、幅広く、多様な情報提供者 (informant) を活用した複眼的クラスワークを導入することは可能であり、有意義であろう。

その上で、AET と NET との意見交換や、中・高・大連携の JTE 同士の定期的な意見交換などのネットワークやシステムづくりをしていくことも必要であろう。これはまた、それぞれが自文化を担った JTE, AET, NET 一人ひとりにとっても、自らの異文化コミュニケーション能力を高め、さらに教育方法を錬磨する訓練の場ともなるであろう。

試行錯誤的に実施されてきた JET プログラムの“JET 効果”を担った“AET 世代”によるチャレンジを受けて、いま大学英語教育がいかにか自己改革できるかということが、将来的には JET プログラムの改善や日本の英語教育界における諸問題の解決にもつながるものとなろう。このことはまた、日本列島に点在する大学それぞれが、日本の「国際化」を単に国家的理念として祭り上げるのではなく、ローカルな草の根レベルへと引きずりおろし、日本人一人ひとりにとって具体的でグローバルな国際化活動へと日常化していくうえで、重要なリーダーシップを発揮する得難い契機になりうると確信する。

## 注

\*本論文は、1993年9月8-10日、仙台市の東北学院大学で開催された JACET (大学英語教育学会) 第32回全国大会で研究発表した「“AET 世代”と大学英語教育」を基に、その後の資料やアンケートのデータなどを用いて研究加筆したものである。

- 1) 文部省, 自治省, 外務省, 地方公共団体の主催の「語学指導等を行う外国青年招致事業」で, 財団法人自治体国際化協会 (the Council of Local Authorities for International Relation = CLAIR) の具体的協力に支えられている。プログラムの目的は, 外国語教育の改善と共に, 外国人とその地域の人々との国際交流を通して日本の国際化を図るとしている。参加者は1年の契約で, 最高3年まで更新できる。AETのほとんどは専門の英語教師ではないが, その役割はいくつかの学校をかけもちで訪問したり (“one-shot” visit), 一つの学校に所属して, 日本人教師と共に英語の協同授業 (team-teaching) を行う。
- 2) 和田 稔: 国際交流の狭間で—英語教育と異文化理解—。研究社; 17, 1991.
- 3) Kazuko Miyashita: The Writing of Original Text-books, AN AMERICAN in MIYAZAKI and AN AMERICAN in KAGOSHIMA As a Cross-Cultural Approach to English Language Education. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 第8号, 43—49, 1992.
- 4) 「中・高・大連携の重要性」について, 小田幸信 (同志社女子大短大) 氏は, 『JACET 通信』No 90 (1993年9月) の【巻頭言】で次のように述べている。「オーラル・コミュニケーションと異文化理解を二本の柱とした教育を受けて来る生徒が, 数年後には大学入試を受けるわけであるから, そのことを考慮に入れて大学入試も大いに改善されなければならない。」
- 5) 全国の AET によって組織された The Association for Japan Exchange and Teaching (AJET) は, 各県毎と全国規模でニューズレターを作成し, お互いの情報交換を行っている。本論文にある県外からの回答はこの AJET の協力によるものである。また, 海外の元 AET の中には同窓会を相識して AET 選考などに協力している者も多く, 今回の調査でもその中の一人, シアトル在住の元 AET のアメリカ人, Mr. Douglas Kern (日本総領事館勤務) の協力を得た。
- 6) 1993年12月22日付の THE DAILY YOMIURI 誌上の Letters To The Editor 欄に, 匿名の AET による “AET failure” という記事が掲載された。要約すると, 「もし AET の役割が日本の国際化と青少年に他人への尊敬を教えることだとしたら, 完全に失敗であろう。何故なら, 自分の毎日は, “ガイジン” と指さされ, 時には\*\*\*の4文字の言葉でののりされる日常生活を送っているからである。」その後, この記事をめぐっては連日のように, 高校生をも含む読者から賛否両論の記事が寄せられ続けている。
- 7) 「英語であろうと日本語であろうと, それによって『何を話すか』が肝心だ。まず, 自分の考えをまとめ, 表現しようという姿勢がなければならない。」  
1993年8月31日 朝日新聞社説「使える英語」教育への転換を
- 8) 萬戸克憲: 国際化と英語科教育—異文化間コミュニケーションへの提言—; 大修館書店, 219, 1992.

## 資料 ①

AET (assistant English teacher : 英語指導助手) についてのアンケート 1993年5月

性別 (男 女)                      学年 (1 2 3 4 5 6)  
 海外渡航回数 (0 1 2 3回以上)      総合期間 \_\_\_\_\_ 渡航先 \_\_\_\_\_  
 出身中学 \_\_\_\_\_ 県 (国・都・府・市・町・私) 立 \_\_\_\_\_ 中学校 卒業年 19 \_\_\_\_\_  
 出身高校 \_\_\_\_\_ 県 (国・都・府・市・私) 立 \_\_\_\_\_ 高等学校 卒業年 19 \_\_\_\_\_

下記の質問について, 該当する答の番号を○で囲んで下さい。(該当するもの全てを○で囲んで下さい)

1. 中学時代, 英語の授業で AET または外国人教師に, 平均どのぐらい習いましたか。
  1. 毎時間    2. 週1回    3. 月2回    4. 月1回    5. 学期1回    6. 年1~2回    7. 無い
  8. その他 \_\_\_\_\_
2. AET はどこの国の人でしたか。
  1. 米国    2. 英国    3. オーストラリア    4. カナダ    5. ニュージーランド    6. その他
3. 中学時代, AET の授業をどう思いましたか。
  1. 楽しかった    2. 役にたった    3. 理解できた    4. いやだった    5. 難しかった
  6. その他 \_\_\_\_\_
4. JTE (日本人英語教師) と AET の協同授業はどうでしたか。
  1. よく協力していた    2. 普通だった    3. あまり協力していなかった    4. AET 任せだった

5. その他 \_\_\_\_\_
5. 中学時代, JTE と AET の協同授業について, どのように感じましたか。  
 1. 単独授業より楽しかった 2. 外国や異文化に興味をもった 3. 国際化を感じた  
 4. 無意味だと思った 5. その他 \_\_\_\_\_
6. 高校時代, 英語の授業で AET または外国人教師に, 平均どのぐらい習いましたか。  
 1. 毎時間 2. 週1回 3. 月2回 4. 月1回 5. 学期1回 6. 年1~2回 7. 無い  
 8. その他 \_\_\_\_\_
7. AET はどこの国の人でしたか。  
 1. 米国 2. 英国 3. オーストラリア 4. カナダ 5. ニュージーランド 6. その他
8. 高校時代, AET の授業をどう思いましたか。  
 1. 楽しかった 2. 役にたった 3. 理解できた 4. いやだった 5. 難しかった  
 6. その他 \_\_\_\_\_
9. JTE (日本人英語教師) と AET の協同授業はどうでしたか。  
 1. よく協力していた 2. 普通だった 3. あまり協力していなかった 4. AET 任せだった  
 5. その他 \_\_\_\_\_
10. 中学時代, JTE と AET の協同授業について, どのように感じましたか。  
 1. 単独授業より楽しかった 2. 外国や異文化に興味をもった 3. 国際化を感じた  
 4. 無意味だと思った 5. その他 \_\_\_\_\_
11. 中, 高校時代と比較して, 大学入学後の英語や英会話の授業についてどう思いますか。  
 1. 役に立つ 2. 楽しい 3. やさしい 4. 興味がある 5. 難しい 6. 興味がない  
 7. その他 \_\_\_\_\_
12. 大学の英語や英会話の授業に関して, どのようなことを望みますか。  
 1. 時間数の増加 2. 少人数クラス 3. 協同授業 4. 海外での短期語学留学  
 5. その他 (具体的に) \_\_\_\_\_

資料 ②

AET/ALT QUESTIONNAIRE

June 1993

Name \_\_\_\_\_ (optional) Age \_\_\_\_\_ Nationality \_\_\_\_\_  
 Sex \_\_\_\_\_ Profession \_\_\_\_\_ Degree (Major) \_\_\_\_\_  
 The period you ('ve) worked as an AET/ALT in Japan  
 From 19 \_\_\_\_\_ to 19 \_\_\_\_\_ AND From 19 \_\_\_\_\_ to 19 \_\_\_\_\_  
 The school/organization you belong/ed to  
 \_\_\_\_\_ (prefecture, city, town, district, school) \_\_\_\_\_ Prefecture

PLEASE CIRCLE THE ANSWERS THAT ARE MOST APPROPRIATE FOR YOU:

1. I enjoy/ed working and living in Japan. a. b. c. d.  
 a. Most of the time. b. Sometimes. c. Seldom. d. Never.
2. I enjoy/ed teaching English/foreign language to Japanese students. a. b. c. d.  
 a. Most of the time. b. Sometimes. c. Seldom. d. Never.
3. I enjoy/ed team-teaching with Japanese teachers of English. a. b. c. d.  
 a. Most of the time. b. Sometimes. c. Seldom. d. Never.
4. I have/had difficulty/trouble communicating with Japanese students. a. b. c. d.  
 a. Most of the time. b. Sometimes. c. Seldom. d. Never.

5. I have/had difficulty team-teaching with Japanese English teachers. a. b. c. d.  
a. Most of the time. b. Sometimes. c. Seldom. d. Never.
6. I am/was keenly interested in English language education in Japan. a. b. c. d.  
a. I agree. b. I agree somewhat. c. I disagree somewhat. d. I disagree.
7. The JET program is useful for improving teaching English in Japan. a. b. c. d.  
a. I agree. b. I agree somewhat. c. I disagree somewhat. d. I disagree.
8. What have you found most frustrating while teaching Japanese students?  
\_\_\_\_\_
9. How beneficial have you found your AET/ALT experience?  
\_\_\_\_\_
10. What deficiency have you found in the JET program?  
\_\_\_\_\_
11. What does "internationalization" mean to you? (Continue overleaf, if necessary)  
\_\_\_\_\_
12. The JET program contributes to the "internationalization" of Japan. a. b. c. d.  
a. I agree. b. I agree somewhat. c. I disagree somewhat. d. I disagree.
13. I contribute/d to the "internationalization" of Japan as AET/ALT. a. b. c. d.  
a. I agree. b. I agree somewhat. c. I disagree somewhat. d. I disagree.
14. How do you think the JET program can be improved to meet the "internationalization" of Japan?  
\_\_\_\_\_

Thank you very much for your cooperation. Kazuko Miyashita